

C1:男子体操競技

男子審判長 森 直樹

令和6年度全国高等学校総合体育大会体操競技大会が2024年7月30日から8月1日まで福岡県北九州市の北九州市立総合体育館において開催されました。この会場は2021年10月に第50回世界体操競技選手権が開催されたということもあり、体操の聖地となっている場所です。そのような会場で高校生の全国大会が開催されることを審判員として大変喜ばしく思っています。

監督会議では適用規則の確認や、マナー面での注意事項について説明しました。適用規則は2022年版高等学校男子適用規則であり、ここに記載のないものはすべて2022年版採点規則（一般規則）であること、マナー面においては、体操競技情報31号の記載内容でもある、器械の準備は3名までであることと、前の選手の演技終了を待たずにマットに上がって準備をするといったことがないように注意していただくことを再確認させていただきました。また、Dスコアに対する問合せは、例年通りD1審判に直接行い、意見の相違があった場合に限り審判長に問い合わせることができること、問合せはDスコアの他にもニュートラルディダクションについても認めることも合わせて伝えました。

審判会議および審判研修においては、高等学校適用規則の内容を全体で共有し、理解を深めました。その後種目ごとに分かれて、出場する全ての選手を公平公正に採点すべく、D1審判を中心に今大会における採点の方向性や減点内容について共通理解を図りました。

競技会においては、予選と決勝を通して、演技とその得点を見てみる限り、一都道府県や一所属に偏った採点が行われていたり、競技の日程や時間によって得点の基準が変わったりするなどといった問題はなく、全ての審判員が一貫して公平公正に採点することができていたと感じました。演技内容を見てみると、静止技における静止時間の不足が多くみられたことがとても気になりました。これについては毎年報告書を通して伝えてはいるものの、情報が浸透しておらず、残念ながら今大会においても多くの選手が静止技における静止時間への意識が薄いと感じました。特に平行棒における脚前挙からの伸腕屈身力倒立（伸肘倒立）や後ろ振り倒立、つり輪における脚前挙や倒立の際の静止時間の不足が多く見受けられ、技の不認定や大欠点を被るかたちとなってしまいました。今一度日々の練習の中で静止に関する意識を高めていただきたいと感じました。

Dスコアに対する問合せは6種目を通して予選で22件、決勝で11件ありましたが、その内4件はD審判による難度判定や計算のミスによるものであり、直ちに得点の修正をしました。残りは技の判定に関する内容であり、D1審判の説明においてご納得いただきました。残りの半数は監督の計算や認識の誤りによるものであり、採点規則の共通理解がなされていない実態を知ることができたと同時に、今後の改善策の必要性を感じました。審判長への問合せ（インクワイアリー）は全日程を通して1件もありませんでした。

監督会議にて説明させていただいたマナー・モラル面においては、全体的にはよく守られていると感じました。しかし、強いて言えば、競技中に大会が準備したタンマボックス周辺に、所属が準備したタンマを入れる容器やハチミツ等のボトル、霧吹き、雑巾などが散乱していたことが気になりました。マット上だけでなく、会場全体をできる限りきれいに使おうとする意識を持つ選手が増えると良いと感じました。

最後になりますが、大会実行委員会、高体連関係役員、福岡県体操協会や補助役員、その他大会に携わられました多くの皆さまのお陰により素晴らしい大会となりましたこと、心より感謝申し上げます。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版高等学校男子適用規則の確認
- ・雄大なアクロバットの跳躍技において、先取りのある頭や腰の位置の高い着地を評価する。
- ・宙返りひねり技でのゆがみのない正確な実施を評価する。
- ・グループ I の旋回技や力静止技、柔軟技において丁寧で美しさを表現する捌きを評価する。
- ・静止時間不足やアクロバット技の前の2秒以上の停止を厳密に採点する。

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・宙返りの連続において、2つ目の技で大欠点と判定した実施は組合せ加点なしとした。
- ・前方伸身宙返り(ひねり)で腰や膝のまがり、明確な伸身局面が見られない実施は屈身やかかえ込み宙返り(ひねり)A 難度と判定した。
- ・静止技において静止の見られない実施は不認定とした。

■E スコアについて

- ・雄大で高さのある高難度の宙返り技で着地準備の見られる高い着地姿勢の実施を評価した。
- ・静止技において、正しい姿勢からの逸脱や静止時間を厳密に判定した。
- ・アクロバット技の前の停止時間を厳密に判定した。
- ・宙返りひねり技でのひねり不足やゆがみのみられた実施において相応の減点をした。

3. その他特記事項・意見・感想等

		【予 選】258 演技中	【決 勝】81 演技中
技数不足	※6 技以下	11 名 (4.3%)	0 名 (0.0%)
D スコア最高		5.9	5.9
D スコア平均	※6 技以下を除く	4.34	5.00
F 難度以上の実施		3 名	2 名
組合せ加点 1 つ (2 回宙返り含)		0.1 : 86(1)名	0.1 : 55(1)名
組合せ加点 2 つ (2 回宙返り含)		0.2=0.1+0.1 : 6(2)名 0.3=0.2+0.1 : 1(1)名	0.2=0.1+0.1 : 4(2)名 0.3=0.2+0.1 : 1(1)名
E スコア最高	※6 技以下を除く	8.733	8.733
E スコア平均	※6 技以下を除く	7.689	7.994
E スコア 8.5 以上	※6 技以下除く	14 名 (5.4%)	11 名 (13.6%)
着地加点	※終末技	27 名 (10.5%)	19 名 (23.5%)
転倒		22 名 (8.5%)	6 名 (7.4%)
2 回宙返りの実施数		166 名 (64.3%)	75 名 (92.6%)

ゆかは難度の高低に関わらず、1つの宙返り技で多くの減点ポイント(高さ・脚の開き・姿勢・ひねり不足・着地準備・着地姿勢など)がある。高いEスコアを獲得するためには、宙返りひねり技での正確な実施や、着地を止めることはもちろん、着地を止めた場合においても着地準備の見られる頭や腰の位置の高い着地姿勢が必要となってくる。着地の重要性を鑑み、高校適用規則では終末技の着地加点を設定しているが、上の表を見てみても着地加点が与えられた選手は多いとは言えない。「ゆか」は着地をする回数が多い種目であることから、高いEスコアを獲得するために終末技はもちろんのこと、全てのアクロバット技において安定した着地を心がけた取り組みを期待したい。

1 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版高等学校男子適用規則の確認。
- ・肩から足先までが一直線で、腰の位置が高く、雄大かつスピード感のある旋回を評価する。
- ・演技全体として、最初の旋回から最後の旋回まで質の変わらない(安定したリズムでの)実施を評価する。
- ・旋回の足先が上下することなく、正しい向きや姿勢での安定した実施を評価する。
- ・倒立を経過する技では、停滞や力の使用がなくスムーズに持ち込む捌きを評価する。
- ・全ての交差技や片足振動技において、振動を使い、停滞することなく十分な大きさを表現した演技を評価する。

2 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・交差横移動技において、支持姿勢の前に脚部が馬体に乗る実施は不認定とした。
- ・グループⅡ/Ⅲの技において、次の技に続けずに落下した場合は不認定とした。
- ・フロップ/コンバイン技において途中で落下した場合は不認定とした。
- ・倒立下りで倒立位の逸脱が45°を超えた実施や、倒立の際に肘が深くまがった実施、倒立に持ち込む際に著しく停滞したり、足先が45°以上下がったりした実施は不認定とした。また、倒立後に270°以上ひねりながら3部分移動を行う技については、コントロールがされておらず3部分移動が不明確な実施等について、倒立に上げるまでの難度(一つ低い難度)で認定した。
- ・馬端でのシュテクリAはA難度で認定した。
- ・演技を実施したが、1技も認定できなかった演技については、技数不足のND10.00で対応した。
- ・オーダーミスが1件あった。該当選手から0.3のND減点で対応した。
- ・終末技を2回やり直した選手が1名いた。制止する前に演技を始めたため、1回目のやり直しの部分までを採点するよう対応した。

■Eスコアについて

- ・縦向き3部分移動技において、角度逸脱がみられたものは両手を着く位置のずれを見て減点をした。
- ・倒立技に持ち込む際に力を使用した実施は中欠点から大欠点の減点とした。また、膝や肘のまがり、停滞などについては、各々別に減点をした。
- ・旋回でバランスを崩して膝がまがったり、馬体に脚が接触したりした場合は1回毎にそれぞれ減点をした。

3 その他特記事項・意見・感想等

予選 【 253 演技 】 ※0点は除く		決勝 【 84 演技 】 ※0点は除く	
Dスコア 最高	5.8	Dスコア 最高	5.7
Eスコア 最高(7技以上)	8.466	Eスコア 最高(7技以上)	8.566
Dスコア 平均	3.423	Dスコア 平均	4.213
Eスコア 平均	6.879	Eスコア 平均	7.590
落下者数	79名	落下者数	14名
1演技中2回以上の落下者数	17名	1演技中2回以上の落下者数	2名
交差倒立技の実施者数	5名	交差倒立技の実施者数	5名
技数不足(6技以下)でのND	21名	技数不足(6技以下)でのND	0名

あん馬は比較的落下が多い種目ということもあり、予選では31.2%、決勝では16.6%の落下となった。さらに、1演技中2回以上の落下も予選では17演技あった。肘まがりや腰まがり、停滞、力の使用等で不認定もしくは難度の格下げになったケースも多く見受けられた。Dスコアを上げてどんなに難しい演技構成を組んだとしても、あん馬の基本となる質の高い旋回、正しい向きでの実施、力を使わないスムーズ且つ雄大な演技でなければ、減点が増えていってしまうため、今後もDスコアの向上はもとより、常につま先と膝が伸びた状態で、足先が上下することなく安定した旋回で且つスピード感のある演技というのを1つでも多く見られるよう期待したい。

1 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版高等学校男子適用規則の確認。
- ・演技全体として美しさと強さを表現した演技を評価する。
- ・倒立や静止技で正確な姿勢と静止時間を評価する。
- ・安定感のある演技を評価する。
- ・演技開始時や、力技の後に肘をまげて逆懸垂になる捌きは減点の対象となる。
- ・倒立位で腕がケーブルに触れる、肘や腰を使って調整する減点について。
- ・難度表にない姿勢での2秒以上の静止は減点の対象となる。

2 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・静止技や力技で静止時間不足の実施は減点、静止が見られない実施は不認定とした。
- ・後方（前方）車輪倒立（2秒）において腰が45°を超えてまがった実施は不認定とした。
- ・け上がり支持において支持局面で肘が深くまがる実施は不認定とした。
- ・ホンマ十字懸垂において、ホンマの腕の角度が高い実施は十字懸垂のB難度のみを認定した。
- ・ヤマワキ、ジョナサンで回転の途中で支持が見られるような実施は不認定とした。
- ・中水平で肩の位置が高い実施は上水平として判定した。

■Eスコアについて

- ・力倒立においてケーブルへの接触や姿勢不良が多く見られた。
- ・振動倒立技において減点のない演技はほとんど見られなかった。
- ・力技における角度の逸脱や肘のまがりは相応の減点をした。
- ・静止技、力静止技における静止時間の不足が多く見られた。
- ・肘のまがりが認められていない技での肘のまがりが多く見られた。
- ・着地減点のある演技が多く見られた。

3 その他特記事項・意見・感想等

D難度以上の力技に対する加点があった演技は決勝85名中29名であり昨年と同じ数であった。最も多い加点は0.4で2名の実施があった。E難度の力技を構成した演技は7演技あり高度な技を実施する意欲を感じた。また、着地に対する加点があったのは、決勝で22名であり、団体4人中3人着地を止めたチームが1チームあった。

全体を通して、D難度以上の力技に意欲的に取り組む実施が多く、姿勢についても良い実施がいくつみられたことは良い傾向だと感じた。しかし、中には中水平で肩の位置が輪よりも高く、上水平と判定したものや、ホンマ十字懸垂の持ち込み時の肩の位置が高く、十字懸垂のみの認定となった演技もいくつみられた。また、力倒立や倒立に持ち込む際のケーブルへの接触や力技の弱さを感じる演技が多く見られた。Dスコアを上げるためには高難度技の実施は不可欠ではあるが、それに加えて基本の倒立が不安定だと高得点には結びつかない。また、脚前拳などの簡単な力技・静止技においても2秒の静止が求められているが、静止時間不足で0.3の減点を伴う実施がいくつもみられた。静止技における静止時間については、普段の練習からしっかりと意識をして取り組んでもらいたい。また、肘をまげて力技・静止技を行ったり、力技に持ち込む際に肘をまげて行ったりする実施も多くみられた。力技に関しては、短時間で習得できるものではないので、今後の継続的なトレーニングで強化してもらいたい。

終末技に関してはD難度以上の技の実施が多く、良い傾向だと感じた。しかし、着地に対する意識はまだ物足りないように感じた。

演技開始前のアップ時間の長さについては、昨年と同様で時間を超えるチームが多かった。さまざまなケースを想定しながら、アップ時間の使い方を考えていただきたい。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版高等学校男子適用規則の確認
- ・雄大な跳越、および着地準備局面を示し、腰が高い位置での着地を評価する。
- ・第一局面、着手、第二局面、着地の減点の確認

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・伸身カサマツにおいて腰のまがりがみられた実施は伸身として判定した。
- ・伸身ツカハラにおいて腰が45°を超えてまがった実施は屈身ツカハラとして判定した。
- ・問合せは1件、ND（ライン減点）についての確認があった。

■Eスコアについて、以下の実施に留意して減点をした

- ・第一局面での脚の開き
- ・着手の際の倒立姿勢
- ・第二局面での姿勢、膝、つま先の減点
- ・着地までの準備局面、着地姿勢、ひねり不足
- ・着地

3. その他特記事項・意見・感想等

昨年大会の決勝においてDスコア5.6の跳越技を実施した選手は6名であったが、今年は4名の選手が実施した。Dスコア5.6の実施はすべてロペスであった。決勝における跳越技の分布は以下の通りである。

■決勝出場者85名における跳越技の分布

Dスコア	実施数	跳越技と実施数
5.6	4名	ロペス(4名)
5.2	20名	ドリッグス(18名) ローチェ(2名)
4.8	32名	伸身ユルチェンコ2回ひねり(1名) ロウ・ユン(2名) アカピアン(29名)
4.4	15名	伸身ユルチェンコ1回半ひねり(2名) 伸身カサマツひねり(13名)
4.2	11名	伸身ユルチェンコ1回ひねり(1名) 伸身カサマツ(10名)
3.8	1名	伸身ツカハラ(1名)
0点	2名	手を挙げてポーズのみをした選手(2名)

優勝はロペスを腰の高い着地姿勢でわずかな着地の乱れで立った15.000 [D5.6,E9.400]であった。2位もロペスで14.900 [D5.6,E9.400,ND0.1]、3位はドリックスで着地を止め14.766 [D5.2,E9.566]という結果であった。決勝で着地を止めて加対象となった選手は4名（ドリックス2名、伸身カサマツひねり1名、伸身ユルチェンコ1回ひねり1名）であった。Dスコアの高い技でも着地を狙って止めにくい選手が数名おり、習熟度の高さを感じた。

全体的な感想として、ツカハラ系の第一局面で脚が揃っている実施が多かった。Dスコア4.8以上の実施においても揃えている選手が多く、第一局面での減点を極力減らそうという意識が強く感じられた。しかし、少数ではあるが脚を大きく開いている実施(0.5相当)もあり、着地がまとまってもEスコアが伸びなかった演技もあったため、ツカハラ系を実施する選手は意識をして練習してほしいと感じた。また、Dスコアが高い技でも、着地姿勢が低かったり、横に着地が乱れたりした選手はEスコアが伸びず、Dスコアが4.8未満の技でも、腰が高く安定した着地をした選手には9点台のEスコアが出ていた。跳馬は着地の印象が大きい種目であるため、Dスコアが高い技へのレベルアップを目指しながらも、安定した着地姿勢を意識してほしいと感じた。最後にマナー・モラルについて、跳馬を直接濡らす行為や助走路でのアップ等をする選手はいなかった。挨拶についても大きな声で挨拶が行われており、マナー・モラルの面では、素晴らしい対応であったと感じた。指導者の方々に感謝し報告とする。

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・2022年版高等学校男子適用規則の確認
- ・評価すべき演技の確認

肘を伸ばした美しい倒立姿勢を表現した演技や、雄大な終末技かつ腰高で安定した着地を評価する。

D スコアについて

- ・静止技において静止がみられない実施は不認定となる。
- ・支持や倒立で完了する技において、90°以上肘がまがる実施は不認定となる。

E スコアについて

- ・前振り上がりにおいて、背中が水平より低い実施は減点となる。
- ・終末局面が倒立位の技における角度逸脱に対しては、相応の減点を行う。
- ・後ろ振り倒立において、力を使ったり、腰をまげて倒立に持ち込んだりした場合、相応の減点を行う。
- ・静止技における静止時間の不足については厳密に判定する。
- ・終末技の着地姿勢(高さ)について、頭や腰の位置が高い実施を評価する。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・「前振りひねり倒立」において、倒立位から45°を超えて逸脱した実施であってもC難度を認定し、E審判によって0.50の減点をした。(高校適用規則)
- ・「ディアミドフ」において、倒立姿勢を示さずに肘をまげて直接前振り上がりに持ち込んだ実施は不認定とした。
- ・「ティップルト」や「バブサー」において、脚がバーの上ののった実施は不認定とした。
- ・「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持」や「ヒーリー」の支持局面で大きく肘のまがった実施は不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

着地については1歩(1hop)以内で着地をまとめた演技が多く良い傾向だと感じたが、頭、腰の高さが低い着地姿勢がほとんどであった。国際的にも腰の位置が低い実施については大きく減点される傾向にあり、高校生であるこの時期から意識して強化してもらいたい。

昨年同様、静止技に課題があった。「脚前挙支持(2秒)」や「後ろ振り倒立(2秒)」、「伸腕屈身力倒立(2秒)」といった静止技は大多数の選手によって実施されたが、静止時間が2秒に満たない実施が非常に多くみられた。すべての静止技は、静止時間が2秒に満たない場合は0.3の減点であり、静止が見られない場合は0.5の減点であるため、Eスコアに多大なる影響を与える。今後、各校で通し練習をする際、すべての静止技における静止時間を計測し、確実に2秒以上静止しているか必ず確認をしてほしい。

また、「ディアミドフ」や「棒下宙返り倒立」といった倒立で完了する技においては、腕を伸ばした倒立局面を表現しないと不認定となる可能性があるため、コントロールされずに腕支持などに持ち込む実施にならないよう、日々の練習から意識をしてほしい。

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・2022年版採点規則、および2022年版高等学校男子適用規則の確認。
- ・理想の演技、高く評価する演技の確認。
 - ひねりや倒立位において角度逸脱の少ない、膝やつま先まで伸ばした美しい演技
 - 雄大な手放し技（高さ、再びバーをつかむ前に体の伸ばしがあるもの）
 - 準備局面を有し、意識的に止められる終末技
- ・演技開始時の3回を超える振り出しについての減点。
- ・力を使う実施についての減点（チェコ式車輪・エンドー・け上がり倒立）。
- ・演技開始時に、後ろ振り上がり支持から後方浮支持回転を実施した場合の減点。
- ・余分な手の握り換えについての減点。

2. 採点上起こった事項とその処理

Dスコアについて

- ・ヤマワキにおいて、明らかな腰まがりの見られた実施や、伸身姿勢の表現が乏しい実施はB難度（ボローニンもしくは後ろ振り上がり上向きとび越し懸垂）として判定した。
- ・伸身トカチェフにおいて、明らかな腰まがりが見られた実施は、C難度（屈身トカチェフ）として判定した。
- ・肩を半転位した状態での逆手背面車輪は大逆手車輪（B難度）として判定した。
- ・後方伸身2回宙返り1回ひねり下りにおいて、全経過大きく腰のまがりが見られた実施はC難度（後方屈身2回宙返り1回ひねり下り）として判定した。

Eスコアについて

以下の実施において厳密な実施減点をおこなった。

- ・手放し技において、バーを握る前に身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になる実施。
- ・手放し技の後の車輪における肘まがり、姿勢不良。
- ・手放し技や終末技の前の車輪の膝まがり。
- ・け上がりやエンドーの停滞。
- ・閉脚エンドー、閉脚シュタルダーの脚の入れが浅い実施。

3. その他特記事項・意見・感想等

決勝におけるDスコアの最高は6.1、Eスコアの最高は8.600であった。終末技において、着地の止まった判定をした演技は25演技（すべてD難度以上）であった。全体として非常に高い着地への意識を感じた。

Dスコアについて、手放し技の種類は、上向きとび越し・ボローニン・マルケロフ・ヤマワキ・開脚トカチェフ・屈身トカチェフ・伸身トカチェフ・開脚ピアッティ・伸身ピアッティ・コバチ・コールマンであった。組合せ加点は屈身トカチェフ+開脚トカチェフで0.1加点を獲得したのが2例あり、アドラーひねり+伸身ピアッティで0.2加点、アドラーひねり+コールマンで0.2加点を獲得したのがそれぞれ1例ずつあった。

Eスコアについて、演技開始時の3回を超える振り出しが多く見られた。閉脚シュタルダーおよび閉脚エンドーにおいて、膝のまがりが少なく、脚を深く入れた実施も見られたが、ほとんどの実施でバーに足が触れるもしくはぶつかっていた。ロシア式車輪は捌きや肩の転移が不明瞭なものが多かった。後方伸身2回宙返り下りと後方伸身2回宙返り1回ひねり下りで腰がまがるケースが多発していた。全体的に無駄な車輪も省き、技数の少ない演技構成でEスコアを狙う選手が多かった。その分、演技構成が似ているものも多かったが、車輪の質や基本技術における姿勢欠点などで差がつくようになってきていると感じた。実際にヤマワキや伸身トカチェフの伸身姿勢の表現が素晴らしいものも見られ、高い評価につながっていた。しっかりと技を解釈し、理想的な表現ができるように日々の練習、トレーニングをしていって欲しいと感じた。